

# 明治の好古家 根岸武香コレクション資料 ー1

発掘現場から

文化力  
POWER OF CULTURE

## ー「武蔵国分寺の郡名瓦」

はじめに 明治時代に考古・古文書・古器物などの歴史資料を蒐集し愛玩した文化人を「好古家」と呼ぶことがありました。「好古家」たちは遺跡からの出土品など数多くのコレクションを今に遺しています。

『根岸武香』は熊谷市青山に生まれ、幕末から明治期に地域の政治・経済・文化に大きな役割を果たした人物です。とくに文化面では美術品や文化財の毀損、海外流出を憂い自ら蒐集・保護に働きました。根岸の蒐集品の一部は重要文化財となった「短甲武人埴輪」（東京国立博物館蔵）や貴重な典籍類からなる「青山文庫」（国会図書館蔵）に寄贈され、現在でも見学や利用することができます。

本展では根岸家の所蔵する蒐集品の一部から、「武蔵国分寺瓦」に焦点を当て、コレクションの概要とともに根岸の蒐集意図や考古学研究への貢献を紹介します。



「根岸 武香」の肖像

展示資料の概要 「武蔵国分寺」は現在の東京都国分寺市に所在します。

屋根を葺く大量の瓦は国内の各郡が負担しました。瓦には「刻印」や「ヘラ書文字」で郡名を記したものがあり、これを「郡名瓦」と呼びます。

武蔵国は現在の埼玉県・東京都・神奈川県の一部を占める広い地域で、延喜式による郡の区分は以下に記す21郡を編成していました。



『幡羅郡』の刻印「播」

『久良 都築 多麻 橘樹 荏原 豊島 足立 新座 入間 高麗  
比企 横見 埼玉 大里 男衾 幡羅 榛沢 那珂 児玉 賀美  
秩父』（太字は現在の熊谷市域に含まれる）

現行の郡名もありますが、当時の郡には現在の町村に相当する「郷(里)」が編成され、その数は120箇所に及んでいました。コレクションされた「郡名瓦」では、21郡中の久良郡・足立郡・新座郡を除く18郡があり、他に豊島郡内の「白方郷」と久良郡内の「大井郷」の2郷が確認できました。根岸の「郡名瓦」コレクションがほぼ出来上がっていたようです。

資料の来歴 瓦は「武蔵国分寺跡」と南比企丘陵に散在する窯跡(嵐山町、ときがわ町、鳩山町に遺る窯跡で「南比企窯跡群」と称する)からの採取品とされます。完全な形の瓦はありませんが、根岸は明治13年に泉井村(鳩山町)の窯跡を訪ね、同20年には武蔵国分寺跡で発掘を行い瓦を採取をしています。この時の採取瓦には採取地と採取年月日が朱書してありました。根岸は主催する「集古会」という美術・考古遺物等の展覧会(明治34年1月)に、瓦96点(内53点が文字瓦)を出品しています。『集古』第31号の記録と照合すると文字瓦の大部分が遺されていました。

この文字瓦コレクションは明治期の「武蔵国分寺文字瓦コレクション」として貴重です。当時から武蔵国分寺の研究資料として活用され、沼田頼輔はこの文字瓦を考察し「武蔵国分寺発見に係る文字瓦に就きて」(考古界第1-1号明治34年)の論文を執筆しています。根岸武香のコレクションは、武蔵国分寺献納瓦が武蔵国のほぼ全郡に及ぶことを実証した国分寺研究史に残る考古資料です。

蒐集の背景 根岸コレクションの瓦は119点を数え、蓮華文や唐草文で飾られた軒瓦破片を除く

と62点が文字瓦です。武蔵国の郡名瓦は「刻印」で郡名を記した資料が44点を占めます。

根岸は古代以降の古印に強い興味を持っており、自ら「印譜」の編さんを志し、『日本古印史稿』『皇国古印譜』を編さんしています。かつての蒐集品にも銅印や、古文書(田券)、焼印の残る升などが知られ、刻印の残る古瓦も古印の資料として積極的に蒐集したと考えられます。

**文字瓦の内容** 文字の書体は「刻印」と「へら書文字」で、印面の方形区画線内に郡名か郷名を1字、又は2文字を陰刻されています。「叩き具」に刻み付けられた文字では浮彫(陽刻)されています。へら書文字では自由な書体で書かれています。これらの文字は瓦の製作時に押印されたり書かれたもので、納品者である「郡名」を示した「しるし」で、製作時には検品の「しるし」でもあったようです。文字は瓦の平面や小口といった見やすい位置に記されている場合が多く、印の大きさは1.5cm～3cm方形と様々です。文字のシャープさや印字の深さなどから銅製などの金属印であったと考えられます。なお、まれに逆文字となっている刻印文字もみられます。

文字と郡郷の対比は次の通りです(実際に使われていた刻印とへら書の文字による)。

- |                          |                          |
|--------------------------|--------------------------|
| ○ 久良郡 「久良」「久」、(大井郷)―「大井」 | ○ 都築郡 「都」                |
| ○ 多摩郡 「多摩」「多」「玉」「玉瓦」     | ○ 橋樹郡 「橋樹」「橋」「橋瓦」        |
| ○ 荏原郡 「荏原」「荏」「荏瓦」        | ○ 豊島郡 「豊」「豊瓦」 (白方郷)―「白方」 |
| ○ 足立郡 「足」                | ○ 新座郡 〔出土例がない〕           |
| ○ 入間郡 「入間」「入」「入瓦」        | ○ 高麗郡 「高」                |
| ○ 比企郡 「比企郡」「比企」「比」       | ○ 横見郡 「横見」「横」「見」         |
| ○ 埼玉郡 「前玉」「前」「埼玉」「埼」     | ○ 大里郡 「大里郡」「大里」「大」       |
| ○ 男衾郡 「男衾」「男」            | ○ 幡羅郡 「播」「播瓦」            |
| ○ 榛沢郡 「榛」                | ○ 那珂郡 「那珂郡」「那」「珂」「中」「那瓦」 |
| ○ 児玉郡 「児玉」「児」「子玉」        | ○ 賀美郡 「加美」「上」「加」「美」「加瓦」  |
| ○ 秩父郡 「秩父」「父」「父瓦」        |                          |

**武蔵国分寺の瓦生産** 武蔵国分寺は創建期(8世紀後半)と七重塔再建期(9世紀後半)に、「多摩地域」・「入間地域」・「南比企地域」・「末野地域」に拠点となる瓦製造所を設け多量の瓦を製造しました。武蔵国分寺では21郡中、新座郡を除く各郡の郡名瓦が出土しています。窯跡では、明治初年に



瓦葺の復元図

発見されたとされる泉井窯跡群(鳩山町)中の「新沼窯跡」・「金沢窯跡」は、武蔵国分寺の造営期から再建期に主力となった生産地で18郡の文字瓦が出土しており、最近の発掘調査では大規模操業を裏付けるように「新沼窯跡」から26基(重複を含めると29基)の瓦窯跡が発見されています。

#### 参考文献

石村喜英 1960『武蔵国分寺の研究』明善堂書店

有吉重蔵 1986『武蔵国分寺』『国分寺市史 上巻』国分寺市史編さん委員会

新井 端 2015『青山根岸家資料報告(1)―考古資料―古瓦』熊谷市史調査報告書 第1集

手島 英美子 2016『新沼窯跡』鳩山町埋蔵文化財調査報告書 第44集